

平成 20 年度レジリアンス研究会要旨

第 22 回レジリアンス研究会

日時：2008 年 4 月 11 日（金） 15:00-16:15

場所：地球研講演室

タイトル：急激な環境変動下の社会生態レジリアンス—ザンベジ河上流溪谷氾濫原における気候変動への適応

講演者：Dr. Lawrence Flint（地球研招へい研究員、ENDA）

使用言語：英語

[要旨]

近年、食料、水、繊維、エネルギーの需要拡大を満たすため生態システムからいまだかつてない供給を求めるようになった。これらの需要は生態系のバランスに圧力を与え、自然環境が許容量を取り戻す能力を減少させ、生態系サービスを供与する能力を弱体化させた。社会経済開発と環境持続可能性との間に明らかな緊張関係が存在している。

生態系の財とサービスの減少を引き起こした直接的な原因は、生息地の変化、外来種の侵入、枯渇、汚染や気候変動と変化などである。これらのプロセスは社会生態的レジリアンス喪失の脅威を与え、環境と社会経済変化の双方に対する感度を高める。

本報告では、社会経済の脆弱性とレジリアンスを検討する科学的方法、特にこれら広範囲の問題に対する学際的アプローチについて議論する。また、脆弱性に対する社会経済レジリアンスと適応の本質を分析する。レジリアンスに影響を与えている政治経済、社会文化的ネットワークとダイナミズムについて歴史的、現代的生産の文脈の中で議論することによって説明される。

経済活動と「河川文明」を擁する人間の居住地域である氾濫原生態システムを研究の対象とする。事例として現在生物物理的、社会経済的变化を示しているザンビア西部ザンベジ河上流溪谷の Bulozhi「自然」氾濫原に焦点を当てる。この氾濫原は現在の Lozi 民の祖先が居住し、彼らは生態財とサービスを氾濫原から得、強力で活気に満ちた政治経済を生み出してこの地域を独占し、余剰食料を使って軍を擁し経済的機会を享受した。

今日、Bulozhi は低開発の地域とされており、この状況は気候の変動によって悪化しているが、この要因は長い年月の間に社会的に蓄積された脆弱性に対して追加の要因となるのみである。本報告では Bulozhi の脆弱性の原因とレジリアンスを高めるための適応的能力を議論する。

人々の外的内的圧力に対して適応し、社会生態システム (SES) のバランスを維持する能力は、在地的「所有」の立場から問題に対処する能力に依存している。同時に、社会生態システム (SES) のバランスを保全しながら、社会が生活水準を向上する機運、

コントロール、動機を再び取り戻すためには、現在の生産行為を修正し、生産活動を多様化する彼らの能力に依存している。

第 23 回レジリアンス研究会

日時：2008 年 6 月 18 日（水） 15:00-16:15

場所：地球研講演室

使用言語：英語

講演者：Chileshe L. Mulenga（ザンビア大学社会経済研究所・研究員）

タイトル：HIV/AIDS と頻繁な干ばつ下での世帯とコミュニティのレジリアンス
ーザンビア・チパタのムワミ・アドベンティスト病院地域住民の事例

キーワード：農村、世帯、コミュニティ、HIV/AIDS、頻繁な干ばつ、貧困、老年層、若年層と社会化

[要旨]

農村地域コミュニティは社会経済や生態系のショックに対し、世帯とコミュニティの 2 つのレベルで対応する。世帯やコミュニティレベルでの対応は、社会文化的基盤としての世帯の結束やコミュニティの存続を目的としている。ザンビア 地方における HIV/AIDS の高罹患率は、世帯やコミュニティ全体の存続に深刻な影響を及ぼしている。最近の雨期の乾燥化による不作によりこの状況はさらに悪化しており、食料不足や資産の損失を引き起こしている。すでに HIV/AIDS によって 負荷を与えられた世帯とコミュニティは近年の頻繁な干ばつでさらに貧窮の度合いを深めている。

ムワミ・アドベンティスト病院診療域の世帯とコミュニティでは、HIV/AIDS の脅威と頻繁な干ばつに耐えるために社会・文化的な変革が求められている。若年層の適切な社会化と頻繁な干ばつに耐えうる農業生業システムへの移行が、世帯とコミュニティのレジリアンスにとって必要である。

HIV 孤児の社会化へは問題が多くあり、その原因は保護者が圧倒的に老齢の祖母であり、保護者自身がサポートを必要としていることに加え、女性であることが女性と男性の社会的役割分担により、孤児を若い男性と社会化させることを困難にしている。また、老齢の保護者は身体的に弱く長距離を歩けないことから、地域での生活に必要な野生果実、根菜類、食用昆虫、小動物の知識を効率的に伝達することが出来ない。農業による生業システムを変えることは他の農業システムに関する知識と経験不足のため同様に困難である。貧困のため補助なしに技術的な解決策を取ることは難しい。

HIV 感染を防御する若年層の社会化、頻繁な干ばつに耐えうる生業システムが農村地域の世帯とコミュニティのレジリアンスにとって非常に重要である。

第 24 回レジリアンス研究会

日時：2008 年 7 月 17 日（木） 15:00-17:00

場所：地球研講演室

講演者：Tom Evans（インディアナ大学，地理学科；地球研招へい研究員）

タイトル：エージェントベースアプローチによる世帯レベルの森林伐採と植林のモデ

リング：ラオス，米国，ザンビアにおけるケーススタディーより

使用言語：英語

[要旨]

社会・生態システムは本質的に複雑であり，それらの振る舞いを統制するマルチ空間スケールにおける動力によって構成される．これらのシステムの重要な部分は，どのように人間が相互作用するのか，これらの相互作用がどのように人間の振る舞いを変えるのか，そしてそれらの動きがどのように生物物理学的な環境に影響を与えるのかという点である．エージェントベースモデルはこれらの種類のシステムダイナミクスを詳細に分析するための道具である．本セミナーでは，特に森林伐採と植林という土地被覆変化について，社会生態システムにおける世帯レベルでの行動を研究したエージェントベースモデル(ABMs)の過去の適用結果について議論する．これらの ABMs は，ある世帯がどのように土地利用を決定するのか，そして，その決定が分析対象の地域スケールにおけるマクロレベルの結果にどのような影響をもたらすのかを分析することに用いられている．エージェントベースアプローチはこのような種類の研究に有効である．なぜなら，ABMs はアクターとアクターの不均質の相互作用を特定するようにデザインされているからである．

この研究を実演するために，次の一連の研究結果を用いて例題が議論される予定である．それは，1) 米国中西部における植林プロセス，2) ラオスにおける焼き畑農業からゴムプランテーションへの変遷，3) ザンビアにおける気候変動に対する適応に関する研究のためのプロトタイプモデル，この 3 つである．本セミナーでは，GIS そして社会生態システムのスケール依存性を用いて，物理的な環境に対する結合アクターの異なる方法についても議論する．本発表における全体的な目的は，ローカルレベルアプローチのこれらの種類の研究における利点と不利点，地球規模変化の人的側面に関する世帯ベース研究の新たな方向性について議論することである．

第 25 回レジリアンス研究会

日時：2008 年 12 月 5 日（金） 16:00-17:15

場所：地球研講演室

使用言語：日本語

講演者：坪 充（鳥取大学乾燥地研究センタ，准教授）

タイトル：干ばつ対処—南アフリカ、そして南部アフリカ地域

[要旨]

アフリカで最も深刻な自然災害は、餓死をも引き起こす干ばつである。1974年から1975年にかけてサヘル地域で起きた干ばつ災害の犠牲者は、32万5千人に達し、1984年のエチオピアとスーダンでは45万人もの死者が出た。アフリカ南部地域では、1992年に大干ばつが発生し、作物生育期の降雨不足のため、ジンバブエでは食料不足となり、さらに政府の不手際な政策により損失が拡大した。この危機的な災害から、干ばつ災害の防止・軽減のために干ばつ発生の前および事後の災害管理の重要性が高まった。南アフリカは、干ばつ管理の最先端国の一つで、国や地方自治体の災害管理の統合的な運営システムを推進するために国家災害管理センターを設置しており、季節降雨を予報する気象局と連携することで干ばつ管理の強化を図っている。南アフリカのみならず南部アフリカ開発共同体（SADC）地域では、干ばつ災害を緩和するための運営上のシステム作りは、まだ初期段階にあり、干ばつ早期警戒システムの開発が急がれる。

第26回レジリアンス研究会

日時：2009年2月10日（火）15:00-16:30

場所：地球研講演室

共催：地球地域学プログラム

タイトル：アフリカにおける人間の安全保障－「常」と「非常」の狭間で

講演者：峯陽一（大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）准教授）

[要旨]

人間の安全保障の考え方は、UNDP（国連開発計画）の1994年版『人間開発報告書』で最初に打ち出され、2003年の緒方セン報告書によって拡張された。人間の安全保障は国家安全保障を相対化する枠組みであり、人々とコミュニティの下からのエンパワーメントを重視すると同時に、多国間組織に対して、脆弱な人々を保護する特別な役割を与えようとする。人々の不安全は、暴力的紛争、経済危機、自然災害、感染症の流行といったリスクの顕在化、すなわち唐突で深刻な下降によって引き起こされている。アフリカの多くの社会は、飢饉をはじめとする災害に歴史的に対処してきたが、状況はきわめて複雑になってきている。アフリカにおいては、構造的かつ長期的な貧困と状況的かつ緊急の貧困とが、歴史的に収斂しつつあるのである。今回の問題提起は実証的な事例研究ではなく、アフリカにおける人間の安全保障の観点から国際協力の政策的な枠組みを再考し、アフリカ史を読み直し、アマルティア・センのエンタイトルメント理論を再評価しようとするものである。

